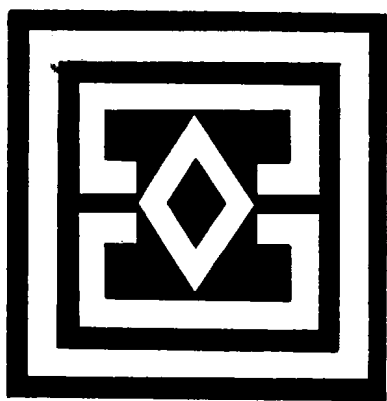


苦
い
杯

上里恵子



杯 い 苦



上里 恵子

著者のプロフィール

上里恵子（こうざと けいこ）

本名 古谷恵子

千葉県市川市生れ、東京育ち

ピーシーズとアイスクリームとコスモスの

大好きな二児の母

現住所 〒465名古屋市中東区高社1-229
ローヤル錦502

苦
い
杯

さかずき

昭和五十三年四月十五日

一五〇〇円

著者 上里恵子

発行者 石澤三郎

発行所 株式会社 栄光出版社

（〒140）東京都品川区東品川一-三七一五

電話 東京（四七一）一二三五（代）

振替 東京七-六二三五〇

印刷 平河工業社
製本 田中製本所

苦
い
杯

第一部

何かがおこった

夕里が帰ってきた！

なんとという僥幸だろう。

彼はまったく夢をみているような心地で、玄関先に立った夕里を迎えた。

すっかり美しい娘になった彼女に、とまどいと気はずかしさを覚えながら、それでも、嬉しいのは隠せなかった。

夕里が昔ながらに清純なのが、彼を一層喜ばしくさせた。

客間で、それらしく久瀬を温めるべき挨拶の一つもしなくてはいけなところだったのだろうが、彼女が父や母に挨拶を了るのを待ちかねて、彼は納屋脇から馬を引き出して来、てれたように笑って、無言で夕里の前に差しつけるなり、

「乗るかい？」

と、きいたのである。

それを言ってから、彼はやたらにポリポリと、額を、頬を、鼻の頭をひっかいた。

すぐには同意しかねた夕里を、チラチラと上目使いで見

てから、彼はひらりと馬にまたがってみせ、手をさしのべた。

「どうぞ、私のお姫様。私は今でもあなたの忠実な僕です」
ブッキラボウなのが、精一杯道化たように言って、ニツと白い歯を見せた。

あゝ……昔のままで……！

サラリときこえた一言を口にするのに、彼は舌を嚙むような想いをしたのである。

夕里は嬉しそうに笑うと、コックリした。たおやかな白い腕を伸ばす。

しっかりとその手を握り合った時、彼等の馬が十年の歳月を一瞬にして跳び越えたのが、互にわかった。

エゾ地の花は、その遅い春、一斉に花開く。春の競い始めた五月の広大な原野を、淳と夕里の馬はひたすらに駆けめぐった。

これから、すべてがよくなる……

そう思われるような、澄んだうららかな大気の中に、萌え出でた若いおきが、はつらつと、かぐわしく満ち満ちていた。

淳は、十年前の二人のあかしをたどった。

此処は夕里を泣かせた小道、あそこは車を引き摺った原っぱ。膝迄濡らして小魚やえびがにをすくったせゝらぎに、二人の宝物を隠した秘密の洞くつにと、果てしもなく夕里を誘った。そこには、至る処に、幼い日の二人だけが知っている、大切な秘密が隠されているのだった。

わけでも、洞くつの中のはら穴には、その頃のまゝの宝物が、誰にも手をつけられずじまわれてあるのを発見した時、思わず二人ながら、歓声をあげた程であった。

今ではその必要もないのに、幼い日そうしたように、「シッ」と夕里が唇に指を当てれば、淳は、慌てて声をひそめて、しきりに手真似で、「見てみよう」と合図する。

一々取り出されて並べられる彼等の幼い日の宝物に、感心したりおかしかったり、すっかりその日に返って、暫くは夢中の時を過したのだ。

そのそばには、確か、ひっそりとしたほこらのある、静かな森が続いているはずだった。二人はごく自然に手をつないで洞くつを出、水しぶきのかゝる小さな滝を廻って、森をたずねて次第にはの暗い高い樹の繁みに入って行った。

「あった！」

夕里は可愛い声をあげて、その胸許で小さく両手を打ち合わせた。

なつかしい、古いほこらをぐるりとひとわたりめぐってしまふと、二人は手を取り合って走り出した。じっとしてはいられないようであった。

少し走ると、夕里は息を切らしていた。淳は自分も肩で息を刻みながら、

「弱蟲！」

夕里を見ながら声を出して笑ってから、ゆっくりと歩調をゆるめた。

「ねっ、聞こえるだろう、夕里、ホラ、あれは木の精のいぶきなんだ。ひんやりと薄暗い魔法のとばりに包まれて、木という木が今、目醒める。春の使いがやってきた」

淳は手にしていた枯枝を真直にかたわらの幹の曲った不幸な木にさしつけると、おごそかに言った。

「あゝ、性根の曲った哀れなものよ。今、余のあらたかなる杖を授けよう。さあ、すぐにその腰を伸ばせ。そちの足なえは治った。そちは立って歩く。歩かぬ時は……歩かぬ時は、すなわち、そちの心根の貧しき故なり。薪にひく」夕里はコロコロと小さく笑い声をたてると、変らぬ憧憬のまなざしで言った。

「坊っちゃま、あなたは少しも変っていらっしやいませんかのね、詩人さん。あなたは、どこか遠い異国の若殿様。夕

里の為に、この東の国も征服してくださいさるの？」

「お望みならば何なりと」

「お城が欲しいわ」

「かしこまりました」

——あゝ、何でも言うがいいさ。夕里が帰って来たんだ！
これからずっとこうして、離れることはない。十年……?!——

淳は上機嫌で首を振った。

彼にはこの幸福が永久に続きそうに思えた。続くことを、
信じて疑わなかった。

ところが、突然……

淳には何が起ったのかよくわからなかった。

一様に二本腰にたばさんだ若いのが数人、忽然と現われて、
ゆく手に立ちはだかったと見る間に、

「ちょっと、つきあってもらうぜ」

夕里がわしづかみにされていた。

「何をする、無礼な。俺の許嫁をどうしようというのだ?!」
彼の大小は奪われ、夕里はしゃにむに彼等に引き立てられていた。

「待てっ、卑怯っ、名乗れ、返せっ……」

「坊っちゃま……坊っちゃま……!!」

と呼ぶ夕里の声だけが聞こえ、彼は夢中でわけのわからないことを叫びたてた。

どうして……どうして……どうしてこんな乱暴な、無茶なことになったのか……事態が信じられないまゝ、恐ろしさと口惜しさで憤りで涙がふり落ち、声がかすれて出なくなった。目の前にチカチカと火花が散り、朱皿をぶちまけたように赤く焼け、やがて真暗になった。

……………

淳には、何も見えず、何も聞こえなかった。太い木の根方にいましめられた姿で、たゞ、うつろな目が、乾いた涙の跡を残して、青黒く苔をしいた何処ともない地の一点に落ちていた。

「坊っちゃん……」

廊下にひざまずいて、元民は部屋げんみんの中の淳を呼んだ。

部屋はしんとして、人の気配もないようであった。

あれから四日になる。

淳は自室にこもったまゝ、ひと足も出て来なかった。
毎日何度かこうして、元民のおとないが続けられているのだった。

耳をすませて待ったが返事がないとわかると、元民はそ

のまゝ静かに立ち去った。

小半刻程の後、また元民が障子の外で呼ぶのが、淳に聞こえた。

「御免下さい。入らせていただきます」

彼が自分から有無を言わさぬ強引さで押入って来たのに、畳にひっくり返っていた淳は、ギクリとして、はじかれたように上半身を起こした。

元民は膳を運び入れて、ほど部屋の中央の淳のかたわらに置いた。そして、その前を僅かに退って手を膝にすると、初めて目を上げて、じっと淳を正視した。

憔悴しきったその人の面変りのしように、元民はあつと胸をつかれた。

不法な侵入者の出方によっては、容赦しない……とばかり、キッと構えた淳のこぶしが、椅をつかんだまゝ僅かに震えているのが、元民にわかった。

元民は、たじろがない視線で、じっと受け止めていたが、その目がじわじわとやさしさにあふれ、哀しみの色に塗り替えられて行くのを知ると、淳は構えを解き、ついと顔をそむけた。

「坊っちゃん。弱ったお体では、よい思案もつきましますまい。お母様のお許しを得て参りました。大変御心配になつてい

らっしゃいます」

「我儘」と言い、「どこまで不出来な」と、心労のあまり、腹立ちまぎれにのゝした清香の言葉を、元民はそのまゝ飲みくだした。

淳の姿から、必死の構えがすっかり消えた。母の心配を考えているのだった。

元民は土鍋から薄くしたかゆを椀によそって、膳の上に置いた。少量宛の、白身の煮魚、豆腐の薄口煮、菜のひたし、汁椀は、丁度食べ始めの赤児か老人の為の献立てのようであり、四日も絶食した淳の不為にはならないようにとの、充分な配慮がなされているものだった。

淳はゆつくりと体の向きを変えた。元民はほんと破顔し、「さあ」と言うように、目で促した。

「私もお相伴させていただきます」

元民は片隅の自分の為の椀を取り上げ、かゆをよそって膳の上につましく置いた。そして軽く一礼してから箸と椀を手にした。一口口に入れてみて、「おいしいです」とでもないように、淳を見て微笑した。

淳は同じように箸と椀を手にした。

元民は何も言わなかった。淳が椀に目を落したまゝ、一口また一口と箸を運ぶのを、嬉しそうに、安堵したように、

たちのほろ湯気の間から見守っているだけであつた。

淳も何も言わなかつた。たゞ、突然、初めて、ハラハラと涙をこぼした。それをあわてて箸を持ったまゝの腕を曲げてこすり、こすりながら食べていた。

淳が夕里と初めて出合つたのは、淳が、そう、十歳の時である。

晩春のとある日、母親のトミに連れられて、三つ年下の夕里が屋敷へやって来た。

祖父の病氣に加えて、父親が飲酒の上で大怪我をしたので、トミの手がまわりきらず、従つて暫く暇をもらいたいが、娘を代りに使つてほしい、と言つて来たのだと後でわかつた。

淳と夕里の二人は、すぐに仲のよい友達になつた。おとなしやかなお姉様の干枝とは違つて、淳は夕方一杯自分の自由になる時間を入つたと思えば出、出たと思えば入り、独りで退屈するでもなくめまぐるしく動きまわつており、棒切れや古びた荷車の大きな輪や、置物のこわれなどを大事そうにしまつていて、ある時は物置から、ある時は野原のほら穴から、引張り出して来ては、得意そうに夕里に見せ、「とてもいい」と言つてもらうのを、秘かに期待してい

るのだつた。

淳は親許を離れて他家にあずけられている幼い少女の身の上に、ひとかたならぬ同情の念を持っていた。それ以上にこの少女をとてゝも氣に入つて、好きだとさえ思つていたから、かなり無理をしても、このナイトは小さな泣蟲の女王の為に、労を借しますその要求に応え、慰め、喜ばせようと、いじらしいまでの努力と心づかいを払っていた。

時には、

「おれのはきものを持つてこい。どこかにあるから探してこい」

などと、にわか暴君ぶりを發揮して、いまいましげに手を上げて怒鳴るようなこともあつたが、おゝむね、花を摘んでやつたり宝物になりそうなものを拾い集めてやつたりと、心やさしいナイトでいる時の方が多かつたのである。

それから程なく、夕里との別れが来た。

父親が亡くなつて、夕里は病氣の祖父を看るということであつた。彼女は駕籠に乗つて歸つて行つた。だが淳はそれを信じなかつた。駕籠が武家のものであることを、ちゃんと見ていた。事情はわからないが、夕里がどこか手の届かないところへ連れ去られた、ということだけは、わかつたのだつた。

「トミ、お前は嘘をついたな。みんな、淳をだましたな」
それ以来彼は、母屋を出て、納屋を根城に住みついてしまったのである。

その空洞をおきながらのように、新しい友、元民と急速に接近することになった。彼のたどたどしい話は、その人柄と同じように、きわめて魅力的だった。遊び疲れると、彼の膝に眠った。

十年前。……

夕里は其後、屋敷へは姿を見せなかった。

トミさえ暇をとっていた。

淳は、こんな時見舞ってやるべきなのか、そのまゝそっとしておくべきなのか、どうしてよいかわからなかった。この際、愛する女性の危難を救うことすらできなかった自分が、行っではいけないのかとさいなまれる迷いがあって、息苦しいまでに心を乱しながら、今日か明日かと、何らかの消息のきかれるのを待ち焦れていた。

これ以上何もせずにいることはできない、と思えるところまで来た時、彼はとうとう元民を呼んだ。

「夕里の様子が知りたい。見て来てくれ」

元民をすぐさま使いに呼ぶと、彼が戻るのをじりじりと

待って、淳は納屋を出たり入ったりした。

「夕里は？」

燃えるような目をして、せきこんで次第を問うた淳に、
「伏っただけです」

元民の応えは、静かな面持のまゝであった。

「夕里さんに、赤ちゃんができました」

淳はあっとなり、息をのむようになった。

次に言われることを待つように、じっと元民を見る。

「あの近所の、口さがない連中が取沙汰しております。子供の父親は、いつかの、あの時の、若い武士に違いない、と」

あの時……あの時とは……?!

「あなたが、坊っちゃん、御一緒に夕里さんの家へ入られるのを、みんな見て知っています」

確かに、誰かに連れられて、——それが木こりであったとは、後で確かされたのだが——夕里の家へ行ったようだ。元民が迎えに来た。……あの時のことだ。その他の時のことではない……!!

彼は急に忙しく、あてどない視線を、何かを探してもするように宙に泳がせた。

それから一刻ばかりの後、淳は母屋に母をたずねていた。

「母さん、折入ってお話したいことがあります」

母の清香は無言でいぶかるように淳を見やった。

「夕里と結婚することを、許してください」

静かな決意をみせて、彼はじっと母から目を放さなかった。

「淳（すなお）さん。……」

思わずふり返った清香の顔付きは厳しかった。母だけは、淳を幼名通り「すなお」と呼ぶのだった。

「夕里と結婚します」

「落着いて、納得できるように話してください。だしぬけに何を言い出すことやら」

淳は少しの間、その母を見守って黙っていた。それから、ゆっくりと口を開いた。

「驚かせるつもりはないのですが、母さん、実は、夕里に子供ができました」

「それが……あなたの子供だと言うのですね？」

「そうです」

「だから、責任をとって結婚する、と？」

「夕里が好きです。ずっと好きでした。妻にするなら、夕里と決めていました」

「淳。あなたは御自分が何を言っているのか、おわかりではないのですね。あなたは蛭崎の連枝、唐沢家の子息です。

嫡男ではないからといって、気儘にすることは、母が許しません。あなたの妻になる人は、蛭崎の伯父上と御相談して、私が決めます」

「……………」

「あなたの妻になる人は、蛭崎の名に不釣合いでない、お武家のお嬢様でなければなりません。おわかりでしょう」

「夕里は、どうなります？」

「若い時のあやまちは、世間にはありがちなこと。夕里はこの家の娘分として、然るべく良縁を得させ、嫁がせてやります。あなたは、これ限り御放念なさい」

「母さん……！」

「夕里の身分は、お忘れではありませんまいね」

「母さん……でも、あなたと同じ『女性』です」

清香はキツとなって、息子を見た。

「娘分として他家へ……？ 母さん、まさか……まさか、あなたにはおできにならないでしょう！ 夕里を愛しています。母さん！」

「何故、私が参らなければなりませんか？ 異国の、『ころ

「びばてれん」でございます」

父の将監が彼女の婚姻について言い出した時、清香は真直顔を上げて、はっきりとそう言った。

「殿の御意志じゃ。僕は御下命を受けたのじゃ」

いさゝか苦しい父の態に、清香は冷えた怒りを以て、高飛車とも見えるものの言い方をした。

「成程。御自分の都合で、必要とあれば、その昔、むつきの上から猫のように捨ててかえりみもなかった娘のことを思い出され、大急ぎで大家の姫にしたりて直すということでございますな？ これは人身御供でございます」

「清香……」

父は、とりなし顔に言った。

「よく存じております。さすれば、將軍家の御当家へのお覚えもめでたくなり、ひいてはお父上様お兄上様のお立場も、いや栄えると申すもの。そうでございますしやう？ その為には、捨てられた猫はどうなろうと構わない、と？」

松前家は清香にとって一体何でございますか？ 御当代は今更私の異父兄だと仰せられる。父上様、清香はあなた様をまことの父上と思うてお慕い申し上げておりましたものを。まことの父とは、かような時、もう少し違った風におっしゃるものと心得ておりました。そのようには仰せ出しに

はならないと。……私の考え違いだったのでございましょう」

蛸崎の家は、遠く若狭武田の流れを汲む信広をその始祖とし、一四五一年（宝徳三年）南部田名部より渡海。このさいはての地の、上の国花沢館に豪族としての基を築いた。信広は共にいた蛸崎季繁の娘をめとり、その姓を襲い、コシャマインの乱と呼ばれる一戦によってアイヌを平定してから、この国随一の実力者となった。松前姓を名乗るようになったのは、ずっと時代をくだって、一五九七年（慶長二年）のことである。一六〇六年（慶長十一年）、慶広の代に居城を今の松前に移し、地名を福山と称した。将監はきわめて多いその蛸崎姓を名乗る旧主の支流である一家の、当代のあるじであった。脇本家蛸崎の血筋には、一六〇九年京より流刑になった、花山院忠長卿の血が入りこんでいるということが、名門の分れというだけのこの旧家を、一種誇り高く支えていたのである。今こそ将監は隠居して家督を一人息子の修理にゆずっているが、ごく最近迄彼は御意見番として別格の家老待遇であり、隠然としたその勢力を、松前家をめぐる城の内外に張っていたのだ。清香はその一人娘。養女、つまり、先代藩主からの「おさげわたしもの」であった。

そうして、清香は嫁いで八か月目に、田村伊織の子を産んだ。

新しく家を興し、城下はずれの、さして高くない丘の上に、こじんまりとした屋敷を構えて住んだ。夫の名はアルベルト・デ・マルチネス、日本名を唐沢主水からさわしゅすゐと言った。清香は、そしてその子に、唐沢家の長男として、「知(さとる)」の名を与えた。二十歳であった。夫の主水は、清香を知ることがなかった。

一年余りを経てのある夜更け。

清香は初めて夫の主水をその部屋にたずねた。

のべられた床の枕辺に、読みなれない漢籍を開いて、かたちばかりは見合に向っていた主水と向い合って坐ると、耐え難いばかりの屈辱をじっと噛みながら、それを色に表わすことなく、毅然と背筋を伸ばし、決然としたまなざしで夫を正視して言った。

「私は、家を出る時、当主である父と兄に、一札を取って参りました。私に生れる男子は必ず武士にとり立て、然るべき縁を得て、武家の息女と婚姻を結ぶようにと。それでなければ私は此処へ嫁ぐのは肯じないと強く申し入れ、その約束で参りました。お断り申しておきますが、私はあなたの子がほしいのではありません。私自身の子がほしい

のです。知さとるは田村伊織によって、私が産みました。あなたとの婚姻は私の意志ではなく、私のあずかりしらぬことでございます。私の想いは、伊織の許へ残っております。伊織は私の娘心に決めた二人といふ夫です。私は、保身の為、出世の為、二人の中を引き裂いた父と兄と、白い目向ける世間に対して報復する為に、あなたによって、もう一人の男子を産みます。引き裂かれたものによって産んだ子と、『ころびてれん』によって産んだ私の子が、父や兄、世間が、母である私をどう扱ったかを思い知らせるでしょう。一人の男子を得るまで、このちあなたは、私を知ることになるのです。そのように御承知おきください」

彼女から言われる言葉は、主水にはほとんど理解することができなかった。しかし彼は、齢若く美しい妻を愛おしく思った。

清香は知を産んでから約二年目に、黒い髪と黒い瞳をもった、母によく似た面ざしの、色のぬけるように白い、混血児——長女千枝を産んだ。それからしばらく、清香が主水の部屋をたずねることはなかった。そして……

春の朧夜、ひそやかな衣ずれの音が幾夜か廊下を渡り、奥の淡い灯影へ消えて去ることがあって程なく、清香は第三子をみごもり、年明けて、厳寒の宝暦元年（一七五一年）

一月十九日早曉、約束の男子を産み落した。

二重瞼のはっきりとした丸い黒い目と、薄桃色に溶けてしまふような肌の色をもったその子が、柔らかくわずかに被打った薄い金色の髪をその形のよい小さな頭にのせており、その全身が、一か月程して生え始めた睫毛と次第に濃くなって行く眉毛と同じような、金色のうぶ毛におゝわれているのを知らされた時、彼女はその心臓を何者かにわしづかみにされてもしたように、悪寒にふるえ上った。しかし、動揺を見せることはしなかった。

慣例に従い、七日目にその子は唐沢家の次男として、『淳（すなお）』の名を与えられたが、母は長男にしたようにその乳飲児を自分の脇に寝かせることはしなかった。他の二人の子と共に、乳母であるトミがこれを養育した。

妻は再び夫の部屋を訪ねることはなく、夫は再びその妻を知ることはなかった。

母に夕里との結婚を宣言して間もなく、淳は敢然として、うろ覚えの道順をたよりに、夕里を見舞に行った。

二度目に淳が訪れた時、トミは顔色を改めて言い出した。「坊っちゃま、どうかもう、此処へはおいでにならないで

くださいまし」

「どうして？」

「お情けの程はどれ程にか嬉しゅうございますが。子供の時とは違います。あれはたゞ想い出として、きれいな想い出として、夕里に残してやってくださいまし。御親切にしていたゞいて、それでどうなるものでもございせん。あなたは、坊ちゃん、蛸崎の御分家の若様です。どうかこれ限りもう、すっぱりとお忘れになつて下さいまし。ねえ、坊っちゃま、それがあなたの御為、夕里の為というものでございますよ。たとえおなかのやゝがあなたのお子であろうと、それはかなわぬことでございます。おわかりでしょう、坊っちゃま。夕里を哀れに思いくださるなら、どうかこれきりになさってくださいまし」

淳はトミの小さな肩に両腕をまわしておいて、やさしく言った。

「トミ。トミ、私を見てごらん。夕里さえよかったら、私は夕里と結婚するよ」

トミは淳の言うことがよくわからないというような顔をして、驚いたように涙を溜めた目でふり仰いだ。

「だから、私に二度と来てはいけないなんて、言わないでくれるだろうね」

い合つて食べるんだ。ずーっとだよ。勿論毎日。ほかに誰もいない。今と同じように、淳と夕里と、二人きりだ」

外出から帰った淳に、身なりを改めた母の清香が言った。

「これから、母と一緒に出かけます。身仕度をしますように」
「どちらへ？」

「蛸崎の伯父上の許へ参ります」

有無を言わせぬものがあつた。

蛸崎の伯父修理との挨拶が済むと、母は、ちゃんと伸ばした背を斜めに彼の方に向き直つて言った。

「さて淳、今日からあなたは、伯父上の許に寄宿させていたゞきます。あなたの将来についても、その上でおいおい、

伯父様がお考えくださるとのことです。慎之介さん、康二郎さんもおいでのことですから、色々教えていたゞかねばなりませんね。よい励みになります。身のまわりの品々や必要な書物などは後から元民に届けさせます。あなたからも、伯父様によくお願い下さい」

言いぬけることはできないとわかつた。

一言の相談もなく、はかられたという口惜しさと憤りから、淳はムツとおし黙つたまゝ、そつけなく、満足に頭も下げなかつた。

野には黄色の福寿草や白い鈴蘭の咲き乱れる季節である。

淳は、見渡す限りすゞやかな香りにつゝまれた花園の真中に、納屋から抱えて来た古いござを敷き、童女のような夕里を坐らせ、花や木の葉を集めて来ては、彼女と向い合つて、まゝごとを始めるのだった。黙つて見ているだけの彼女が、あの頃のようにふいと手をのばして、一緒に彼のことをやり始め、微笑をふり向け、ついには楽しそうに思わず笑い声を立てた時、淳は熱い吐息をもらし、天にもものぼる程の喜びを感じたのだった。

「夕里、笑つたね?! 笑うととても、あゝ、とても可愛いよ」

淳はすっかり嬉しくなり、元気づいて、我にもなく饒舌になつてくるのを、どうしようもないのだった。

夕里は童女のようにたゞにこやかに笑い、向い合つて木の葉の皿に花を散り敷いた御飯を、口許に運ぶ真似をしている淳を、見ていた。

そして、淳は何気なさそうに言い出した。

「ねえ、夕里。こいつを本物でやろうよ。御飯もおつゆも魚もだ。あゝ、いつでも私が焼くよ。昔から夕里は可哀相がつたからね。こういう風にさ。そして、こういう風に向